

2013年12月29日 年末感謝礼拝

説教 主をほめたたえよ

詩篇 103 篇

【詩篇 103 篇】

感謝の詩篇として有名な103篇には、特に賛美のことばが多く含まれています。今年最後の礼拝、この詩篇をもってダビデとともに主を賛美しましょう。

【神さまに感謝？】

先日「レスリングの神さまに感謝したい」と言った選手がいました。神さまのことはよくわからないけれど、何か自分を越えた不思議な幸いをもたらしてくれる存在を「レスリングの神さま」と呼んだのでしょう。実際はどういう神さまかイメージがないのです。

けれども、イスラエルはちがいます。イスラエルの人々は、はっきりと神さまがどんなお方か知っている。「主は、ご自身の道をモーセに、そのみわざをイスラエルの子らに知らされた」（7節）とあります。神さまとは、イスラエルの上にかかがみこんでくださった神さま。クリスチャンもまた、神さまを知っている。この神さまは、何度も何度もクリスマスでお語りしてきたように、人となってくださった神さま。泥の中であえぐ私たちのために泥の中に潜ってくださった神さま。

聖書の歴史観はボートを漕ぐことにたとえられます。ボートを漕ぐ人は、前ではなくうしろを向いて、ボートの航跡を見ながら漕ぐ。今まで進んで来た航跡からそれないように、まっすぐに漕いでいきます。

現代に生きる私たちは「自分らしさ」を求めます。他の人とは、ちがう自分。その自分らしさに自分の値打ちを見つけようとするのです。それは前を向いてボートを漕ごうと

する人に似ています。一生懸命まっすぐに進もうとするのですが、実際はふらふらと進路が定まりません。けれども、私たちが自分がだれであるかを知りたいならば、自分がこれまで歩んできた道を振り返ることです。そこにはただ、神さまに愛され、神さまのあわれみによって救われた自分がいます。私とはだれなのか。答えは「神さまに愛されている者」です。自分が何をなしとげることができるか、で自分を量ってはなりません。自分を愛してください、自分のためにご自分を投げ出してください、主イエスの愛によって、自分の価値を量るならば、物事がうまくいっているときも、うまくいかないときも、私たちの航跡はぶれることはありません。

明治時代のクリスチャンに徳永規矩（のりかね、あるいはもとのり）という人がいました。キリスト教主義の学校である熊本英語学校を造った人ですが、この人は事業に失敗し、全財産を失い、結核を患いました。けれども貧困のどん底にあったときも、神への信頼の中に生き抜きました。『逆境の恩寵』という著書にはいかなるときも神さまへの感謝を忘れなかった証しが載っていて励まされます。「神さまが自分を愛してくださっていること」と「神さまは自分の傍らに生きてくださっている」ということを感謝した生涯でした。神さまの恵みは、私たちを強めて、本気で神さまの御手に生きることが出来るようにしてくれます。本気で神さまの手からだけ受け取って生きる人生を可能にしてくれるのです。

【神さまのあわれみ】

「父がその子をあわれむように、**主**は、ご自分を恐れる者をあわれまれる」（13）とあります。「父がその子をあわれむように」で

す。主イエスのあがないによって、私たちは神さまを天の父と呼ぶことができるようになりました。だから神さまは、私たちをあわれんでくださる。「父がその子をあわれむように」あわれんでくださる。お父さんは、こどものためなら何も惜しむことをしないでしょ。そのように私たちをあわれんでくださる。その父なる神さまのあわれみは、私たちに接する者にまで、私たちを通しておよびます。私たちが変えられ、周りの人びとの祝福の源となるからです。

小説『少女パレアナ』の主人公は、困難の中でも「何にでも喜びをみつけるゲーム」を続けます。それは神さまは私たちが喜ぶことを望んでくださっているという信仰を持っていたからでした。そしてパレアナを通して作中人物たちも、小説を読んだ人も変えられていったのです。



【わがたましいよ】

「わがたましいよ。**主**をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな」（2）ともあります。

私たちも悩みの中にあるとき、神さまの恵みの航跡を確認しましょう。「わがたましいよ」とダビデは自分に言い聞かせました。自分では喜べそうにないとき、感謝できそうにないとき、神さまが感じられないとき、自分がだれだかわからないでいるとき、自分で自分の価値を証明しなければならないように思ってしまうとき。そんなとき自分に思い出させようではありませんか。「わがたましいよ、お前は神に愛されている神の子だ」、と。